

2018年度「FDを推進するための活動補助事業」実績報告

人文学部 井上大樹

1. 目的

本事業では、2017年度後期に引き続きアクティブラーニングを全ての学生に効果的に展開するための支援の在り方を、学年、習熟度、学習習慣の定着、学生の特性（人付き合いなど）などを考慮して詳細に検討する。そのために教育学の知識を持ち、青年期（若者支援など）を研究している大学院生をアシスタントにして、学習準備、班活動（共同学習）、振り返り（まとめ）それぞれの段階における学習課題と支援事例をまとめる。今回は、対象をB201（アクティブラーニング対応教室）以外にも広げる、どの講義でもアクティブラーニングを展開する可能性と意義について明らかにする。また、1年前期の必修科目からアシスタント付きアクティブラーニング形態の講義を展開することを通じて、学生という若者が「大学での学び方」を教育学（保育学）の専門性に引き付けて身につく学習過程を解明し、そのプロセスに潜む困難や課題を明らかにする。

2. 方法

2018年度の井上担当科目のうち、「教育学概論（小）」（前期、1年小学校免許または保育士資格取得希望者受講（事実上の必修））、「教職入門」（前期、1年小学校免許取得希望者受講）、「生徒指導論」（後期、1年小学校免許取得希望者受講）、「生活科指導法」（後期、2年小学校免許取得希望者受講）でアシスタントを各1名動員する。アシスタントにはワークシートチェック（事前学習、学習のまとめ）、班活動支援（机間指導）に担当講師と共同で取り組む。また、講義終了後には受講者の学習状況を詳細に分析し記録にまとめ、次回の指導の改善、重点的に指導すべき学生を特定する。その際、2017年度後期時点で明らかになった学年全体及び個別の課題への対応を分析の視点に据える。また、15回を通じての各学生の活動や学修状況を分析し、アクティブラーニングに向く学生、向かない学生への支援課題と的確な対応、班活動における課題と的確な対応について明らかにしたい。また、「教育学概論（中高）」（教職課程）は「教育学概論（小）」とほぼ同じカリキュラムであることから、ここにもアシスタントを1名動員し、教職志望者の学科間比較も試みる。

3. 成果

(1) 学生の科目横断のAL状況のデータベース化（通年）

こども発達学科の小学校教員養成課程の1～2年の大半が履修する科目を対応教室でALにて展開し、その学習状況をアシスタントの協力にてデータベース化を行うことができた（補助枠以外の取り組みを含めると1～3年まで収集）。実際には、毎回のワークシート（事前学習、授業時間中の学習、本時の振り返り）、アクティビティのうちグループワークの成果物及び個人発表資料とこれらに対するコメント集である。総括会議ではこれらのデータベースをもとに、ALにおける学生別、クラス別、科目別の成果と課題について分析を行うことができた。学年ごとの特徴、クラスごとの特徴、学習者特性に対する対応について、昨年度明らかになった課題をある程度克服する支援メソッドを確立できた。

(2) AL型授業適応度別学生の傾向と支援策

・「まじめな学生」でもALに向かないタイプ

「答えのない問い」に取り組むのが苦手であり、教師や他の学生の評価を過剰に気にする。実際は、自分でテキストを読んで自分の言葉でまとめるなど自己学習力に課題がある。2018年度は1年生に多く見られた。これに対しては、その回で扱う内容（事前学習で講読済み）について班活動やアシスタントの補助で丁寧に確認することで、当該学生の不安感のある程度払しょくできた。また、ワークシートの提出時に「学習のまとめ」の書き方に関する質問にアシスタントが丁寧に答え自分で時間をかけてでも書くようになっていった。なお、一連のプロセスに担当講師が入ると自分で考えず「依存」することが多いため、あくまでも担当講師は「見守る」のが肝要であると考えられる。

・グループの仕切り屋でもALに順応できないタイプ

このタイプの学生は「ノリ」で班活動を進めて適当に終わらせることを狙っている。このような学生については2、3年次になると周りの学生から「見放され」るようになる。ただ、1年次では他の学生が振り回される傾向が2017年度に見られた。これに対し、毎回出席し事前学習をきちんと行っている学生がイニシアチブをとれるよう、講義冒頭で事前学習チェックを行い、事前学習で用意したことを中心にその回の班活動が展開できるよう課題設定や全体への説明に担当講師は配慮した。そのことで、班活動では内容を理解している学生がその場を「仕切る」か「フォロワー」のどちらかを担うようになり、時間をかければ学習（や発表の）内容がある程度深まることがわかった。

（3）AL型授業を徹底することを身につく「主体的学び」の姿勢

2018年度は1年次前期からアシスタントを配置してのAL型授業を取り入れた。その効果は履修者全体に「主体的学び」の姿勢が身につく点でできめんであった。小学校教員養成課程では、1年次前期では「教育学概論（小）」、「教職入門」、その他の教職課程では「教育学概論（中高）」が本事業の対象科目であったが、全ての科目において授業アンケートの「新しい知識を得る」「受講マナー遵守」で否定的評価が全くなく、「（教員の）学生の理解度への配慮」でも否定的評価が全くなかった。アシスタントがいない状態とプログラムは大きく変えていないので、アシスタントを配置することでどんな些細なことでも質問できる環境が学生の「学び」と「意欲」を喚起したことを示していると言える。

1年次後期は小学校教員養成課程で「生徒指導論」が本事業の対象であったが、「予習・復習への取り組み」で否定的評価が前年度10%を超えたのが0%と大きく改善した。前期の2科目でAL型授業への学習習慣（特に事前学習をしっかりと行い、講義のワークに備える）が、担当講師とアシスタントのダブルチェックで十分に定着していると言える。

（4）アシスタントの「年長青年」としての役割への注目

2018年9月に初年次教育学会第11回大会において、2017年度後期から2018年度前期にかけて本事業で取り組んできたアシスタントとの協働によるAL型授業について発表した。その議論では、本事業におけるアシスタントの位置づけについてかつての青年団における「年長青年」が参考になるという報告者の提起に関心が集中した。「年長青年」は仕事や地域活動、私生活にわたって「モデル」になり相手がきいてもらえるアドバイスができる。大学における「年長青年」はさしあたり同じ専門の大学院生がそれにあたると思われる。年齢は近くても、知識や学習方法で学生の身になってアドバイスできる点で、大学の学習が身近に感じてもらえるという点でラーニングアシスタントの条件論議に一石を投じることができた。

4. 展望

（1）他科目等へ「主体的な学び」の姿勢が波及する方策の確立

本事業では3年次「教育課程論」は対象ではなかったが、2017年度に引き続きアシスタントを入れたAL型授業を取り入れた。その結果、学年集団の関係が1年次終了段階では「わかりあえない関係」から3年次終了段階では「どんなことでも指摘できる関係」になり、小学校教育実習事前指導では模擬授業の準備や討論を通じて学生同士で苦手を克服できるまでに「学び合う関係」が深まった。アシスタントを入れたAL型授業によって、他科目等へ「主体的な学び」の姿勢が波及し学年集団全体を変える可能性が出てきている。よって、今後は他科目等へ「主体的な学び」の姿勢が波及するプロセスにも着目して、AL型授業の改善に取り組みたい。

（2）学生の科目横断のAL学習状況のデータベース化（3年分）に向けて

2019年度「FDを推進するための活動補助事業」にて実施予定である。これで、同一学生の1、2、3年次のALによる学習の蓄積などが明らかになる予定である。

（3）学会などへの成果発表

3. で紹介した成果については、得られたデータの詳細な検討を行ったうえで、2018年度に引き続き北海道臨床教育学会、初年次教育学会などで発表し、学外者からの助言を得る機会としたい。

以上